

応禪普善の『関山国師別伝』について

加藤 正 俊

一 関山伝に与えた『別伝』の影響

日本の臨済宗は現在十四派の教団に分れ、それぞれ開山を異にするが、その中でも最大の教団である妙心寺派の開山関山慧玄ほど、伝記の不明な人は珍しい。出身は信州の高梨家といわれるが、嘉暦二年（一三二七）五十一歳で大徳寺の大燈国師（宗峰妙超）に相見するまでの前半生は、深い霧に包みこまれたまま杳として不明であるし、元徳二年（一三三〇）大燈より印可状を授与されるや直ちに濃州伊深の山中に韜晦してしまふ。後に花園法皇に見つけ出されてやむなく妙心寺開山に据えられることになるが、ここでも一時脱出をはかり行方も知れぬ旅に出かけている。現在妙心寺に観応二年（一三五二）八月二十二日の日付けを有する光厳上皇から関山に宛てた妙心寺再住の院宣^(a)の遺る所以である。

このように関山はもともと林下の宗風を一身に体した極めて隠遁癖の強い、むしろ教団否定的な思想の持主であつたと思われる。語録も筆蹟も遺さず、頂相すら遺すことを禁じた関山は、おそらく自己の法系を継承するような嗣法の弟子というものもつくらなかったであろうし、自己の前半生についても固く口を閉じて語らなかったものと思われ

る。

初期の妙心寺を語る最も早い時期の史料として、妙心寺聖沢派の派祖東陽英朝（一四二八—一五〇四）が、明応五年（一四九六）に成稿した『正法山六祖伝』⁽³⁾（以下「六祖伝」と略称）が知られるが、妙心寺開山関山慧玄（一二七七一—一三六〇）の伝もこの『六祖伝』中の関山の章が最も基本となるもので、この章は東陽の師の雪江宗深（一四〇八—一四八六）が文明初年（一四六九）から同十年（一四七八）までの間に撰文した「関山行実記」を基礎とするものである。関山示寂後百拾余年を経て成文された『六祖伝』の関山の章によって、以下に関山の出生とその幼年期を見てみよう。「師諱慧玄、嗣大燈国師。信州人、俗姓源氏、高梨高家之孫也。幼而穎利。父携往相陽登巨福山、拜広嚴和尚一難染。稍長識宗門有仏祖大事因縁。而未啓發者、年垂三十二適值建長開山忌。」

右の文の末尾「年垂三十二」が「年垂五十二」の誤りであることは既に江戸時代の妙心寺派の考証史家達の指摘する通りで、この後関山は直ちに上洛し大徳寺において大燈国師に相見する運びになるのであるが、この時関山が三十歳では大燈はまだ大応に就いて修行中であり、大徳寺も開創されていないことになるのである。故に今この『六祖伝』中の三十を五十と理解して一読すると、関山五十歳までの伝記は漢字七十二字で綴られてしまう程の極めて短く極めて不完全なものに過ぎないことがわかる。ところが一例として最新刊の駒沢大学の『禅学大辞典』⁽⁴⁾（以下「辞典」と略称）で関山慧玄の項を索くと、以下のような記載に出会うのである。

「えげん慧玄⁽¹⁾（一二七六—一二七七）臨済宗。号は関山。信濃（長野県）の人。京都妙心寺の開山。建治三年正月七日信濃中野に城主高梨美濃守高家の二子として生る。幼名を駒の曹子朝明庵といい、叔父月谷宗忠の下で勉強し、鎌倉建長寺の広嚴菴に東伝士啓について得度す。徳治二年（一三〇七）建長寺で大応国師南浦紹明にあり、慧眼の名を受け修行したが、未だ発明するところがなく、嘉暦二年（一三二七）建長寺開山大覚禅師五十年忌が西来院で営まれた折、某僧に教えられて京都紫野の大徳寺を訪ね大燈国師宗峰妙超にあう。（以下略）」

このように『辞典』では『六祖伝』の関山の章に比べて可成り委しい記載が見られる。例えば第一に関山の出生年月日が明記されていることであろう。『六祖伝』で関山の示寂が延文五年（一三六〇）のこととされ、世寿八十四歳とされるから逆算して建治三年（一二七七）関山出生とするのは正しいであろうが、生誕の日を正月七日とするのは何によるのであろうか。それは江戸時代中期、駿州蒲原の妙心寺派竜雲寺住職の応禅普善（一六七三—一七四三）が著した『関山国師別伝』（以下『別伝』と略称）の説くところのものである。『別伝』は関山寂後四百年近い歳月を経過した江戸時代の中頃の著述であるにも拘らず、『六祖伝』にも載せない新奇な説を多く紹介することで知られるが、この正月七日出生説もその一つである。しかしながら著者応禅はその出拠を明らかにしていない。ついで『辞典』は関山の生地を信州中野、実父を高梨高家とする。『六祖伝』では生地を信濃とするのみであるが、信州中野を関山の生地とするのは、妙心寺の無著道忠（一六五三—一七四四）の『正法山誌』や、此山玄淵（一七二一—一七八三）の『正法山六祖伝考彙』（以下『考彙』と略称）や、草山祖芳（一七二一—一八〇六）の『樹下散稿』等の説であり、『別伝』は信州更科説をとる。しかし荻須純道博士が近年この両所（中野・更科）の説に対して共に否定的な見解を示されたように、この両所の説に確たる史料があるわけではない。同様に『六祖伝』では関山を高梨高家の孫とするのに対して『辞典』では先述の『考彙』や『樹下散稿』の説にならって高家の二男とする。また関山の幼名を駒の曹子朝明麿と称するのは、昭和二年刊行の釈仏海著『妙心寺開山勅諭無相大師御伝』に拠るものであろう。その釈仏海が拠るのは「仙台高梨家系譜」中の高梨朝定の息朝明を関山とする一異説に過ぎない。さらに叔父月谷宗忠の下で勉強するという説も『別伝』の創唱するところのものであるが、大応下の月谷宗忠が関山の叔父（或は伯父）であるという証拠はない。むしろ否定的な史料すら発見されている（この史料は本稿の末尾に史料紹介として付記する）。ついで『六祖伝』は鎌倉建長寺の広厳和尚について剃髮得度することになるのであるが、この広厳和尚を『辞典』は聖一派下の東伝士啓とする。この説は卅元師蛮（一六二六—一七一〇）の『延宝伝燈録』（一六七八年撰述）や『本朝高

僧伝』（一七〇一年撰述）の関山伝に記述されるものであるが、広嚴和尚が東伝土啓である証明は示されていない。それどころか草山祖芳が既に『樹下散稿』の中で指摘しているように、建長寺四十五世の東伝は応安七年（一三七四）四月十一日に示寂した人であるのに、その東伝より得度を受けた関山が八十四歳の長寿を全うした上で、得度の師の示寂よりも十四年早い延文五年（一三六〇）に示寂したことになっており、広嚴和尚を東伝とすることは著しく史実にもとることとなるのである。徳治二年（一三〇七）関山が建長寺で大応国師南浦紹明に遇い、慧眼の名を受けたとするのも『別伝』の創唱する新説である（もつとも『別伝』では関山はこの時（徳治二年）大応のもとで薙染得度したとしてこの点を最も強く主張するのであるが、『辞典』では既に『六祖伝』にならって広嚴和尚（東伝）について得度したとするので、大応薙染説には一切触れていない）。

このように『辞典』の関山の伝は、関山の幼年期に限っても、関山の伝記の最も基本となるべき『六祖伝』にも記載されない事項を、江戸時代突如として表れた出拠不明の史伝によって綴っていることがわかる。

それでは何故にこのような誤った関山伝が形成され、訂正されないまま学界にまでも流布してしまっているのだろうか。それは先述した通り関山の伝記が全く不明であるため、時代の経過と共に関山の伝記に次第に種々の推察や臆則が附加される一方、一派の開山の理想化、偶像化が教団内部ですすめられて行ったからに外ならないだろう。関山の史実の不明さは、この際むしろこの動きに一層拍車をかけることになったと思われる。一派の精神的な師表たるべき開山の史実が不明のままでは、教団内の統率や教団外への布教という点で甚だ不便であった筈である。このような観点から、むしろ積極的に教団側の要望を充足させるために、関山伝を創作する者まで出てくることになるのである。応禪の『別伝』こそそのような関山伝の空白に乗り、しかも教団側のある種の歴史的な要請にも応えて創作された全く新しい関山伝であった。

筆者はかつて『禅文化研究所紀要』第四号誌上に「関山慧玄伝の史料批判」なる論稿を発表し、関山の伝記をめぐ

るあらゆる史料を検討し批判したことがあるので、詳細はそれに譲るが、『別伝』が他の関山伝と全く異なるところは、関山の生年を通説の建治三年（一二七七）より二十年も後の永仁五年（一二九七）とした点であった。先述した通り関山示寂の延文五年（一三六〇）が『六祖伝』によって動かない以上、必然的にこの説は関山の世寿八十四歳説と六十四歳説に分れることになるが、応禅が『別伝』で最も強く主張するのは先きに触れた如く、徳治二年（一三〇七）関山が建長寺の大応のもとで初めて剃髪染衣して大応の弟子となることであった。実のところ『別伝』が関山の生誕を永仁五年（一二九七）とするのも、世寿六十四歳説をとるのも、一にかかって徳治二年に関山を大応剃度の弟子とせんがための工作であったのである。後程紹介する『別伝』の原文を一覧すれば判然とする如く、『別伝』中の関山は常に大応と緊密に結びつけられている。『六祖伝』中に一度も顔を出さない大応が、『別伝』中に頻出するのはまことに奇異な感じがするが、そこに『別伝』の著者である応禅の意図を見てとらねばならない。応禅は『別伝』を舞台としてそこで大応と関山の結びつきを大いに演出するのである。しからば大応と関山の結びつきが、なぜこの時、このところで強調されねばならないのか。そのことに就いても、筆者は既にこれを妙心寺派教団の歴史的な要請として論述したことがあるので詳細はそれに譲るが、論述をすすめてゆく必要上、以下に簡単に述べておこう。

臨済宗妙心寺派教団の流れを「応、燈、関」の一流の展開と認識してその一大宣揚をはかるのは、近世日本禪の確立者ともいえるべき白隠慧鶴（一六八五—一七六八）であるが、その萌芽は既に黄檗隠元一派の来朝を機に愚堂東楚（一五七九—一六六一）等によって主張された、妙心寺を一流相承の地とする正燈思想の中に見出される。しかし「応、燈、関」を一流とする思想は、明らかに本家ともいえるべき徹翁一派の大徳寺派教団を無視するものとなるであろう。関山の一流のみが果して大応、大燈の直系であり得ようか。少くとも大徳寺派教団自身は、われこそは大応、大燈の直系なりと自認してやまないであろうし、世間の常識も大徳寺派教団を大応、大燈の直系と認めることにやさかではない。筆者はこの辺の経緯をも既に『禅文化研究所紀要』第六号誌上に「大燈派下の正系をめぐって」という

一文を投じて論じたことがあるので、再度論ずることは止めるが、厳然たる歴史的な事実を背景に、徹翁の法系を以て大応、大燈の正系と自認する大徳寺派教団の主張と存在を無視して、関山の一流こそ大応、大燈の正嫡であることを宣揚して行くためには、それなりの理由づけが必要となってくるのである。関山が師匠の大燈を超えて直接大応と結びつかねばならない理由がここに生ずるのである。『別伝』によると関山は十二歳のとき大応に就いて難染得度するのであるが、この時から大応は関山を大いに器許し、関山の頭を撫でながら「他時老僧の後を擁持する者は儼か」とまで云わしめている。大応の正系たることをこの時既に約束づけられていると云ってもいいだろう。関山は大燈の印可を得た後一旦伊深に隱遁するが、『別伝』説によるとやがて関山は示寂前の大燈の嚴命により、花園法皇の勅に応えて美濃の里から京都に登り、最初に病床にあった大燈を見舞うことになる。『別伝』特有の異説（創作）であるが、この時病床の大燈は関山に対して次のようなことを告げるのである。即ち先師大応が後宇多上皇に迎えられて九州から上洛し安井の稲光庵にいた頃、当時大応の膝下にあつて修行中の大燈に対し、花園の地を指して「わが滅後三十年してここに老僧の児孫が現れわが道を広めるであろう」と予言したという。さらに関山が大応について難髪染衣する時、大燈はその席に列して大応が親しく関山を摩頂しながら「老僧の後を擁持する者は儼か」と語ったという大応付托の語も聞いたというのである。いわば大燈の立会とその承認のもとに、関山は大応の生前から大応の後を擁持することを指命されていたとするのである。かくて応禪の『別伝』による限り「応、燈、関」の系譜（この場合燈を抜いた応、関の系譜と云ってもよい程二者の関係は緊密である）は大応の生前に決定しており、今更徹翁一派の大徳寺派教団の割り込む隙のないことになるのである。応禪の『別伝』説に従えば「応、燈、関」の一流を宣揚することは、決して大徳寺派教団を無視することではなく、まさにこの大応生前の付托に應えることになるのである。応禪はこのようにして大応と関山の特殊な因縁を強調することによって、愚堂時代の正燈思想が白隠時代の「応、燈、関」一流思想へと展開するための理論づけを果したともいえるであろう。『白隠年譜』によると宝暦六年（一七五六）白

隠は駿州手越の高林寺において、大応の四百五十年遠諱の齋会を行うと共に、『大応録』の提唱を行っている。白隠はこの後明和元年（一七六四）にも松蔭寺において大応録会を開いているが、おそらくこれが妙心寺派教団の中で行われた大応忌のはじめであり、大応録会のはじめではなからうかと思われるのであるが、この白隠の行った大応忌、大応録会のすべてに應禪が影響を与えているのである。『白隠年譜』には定本以外に東嶺自筆の草稿本が遺されているが、われわれはこの草稿本の宝暦十三年、白隠七十九歳の項の記載によって、宝暦五年（一七五五）に白隠の命に依じて原から駿府に赴いた東嶺が、たまたま出水のため蒲原の竜雲寺に一泊して應禪と出合い、その節應禪によって大いに大応の事蹟や『大応録』を鼓吹されたことを知り得る。後日、即ち宝暦十三年、翌年（即ち明和元年）の松蔭寺における白隠提唱の大応録会に備えるために、東嶺が蒲原の竜雲寺に應禪の『関山国師別伝』を借用に出かけるのも、この時（即ち宝暦五年）應禪から『別伝』の内容を聞かされていたからに外ならない。『東嶺和尚年譜』の宝暦十三年の項にも全く同様の記述を見ることができる。しかも東嶺はそこで宝暦六年の手越の高林寺における大応録会の宮辨は、「偏に應禪の勸めに因るなり」と誌している。このように白隠はもとより東嶺に至るまで、明らかに應禪の影響を強力に蒙りながら、当時の妙心寺派教団の歴史的な要請でもあった大応の顕彰と応、燈、関一流の思想の宣揚につとめることになるのである。

更につけ加えるならば應禪は『別伝』の外に「関山国師遺誠」（以下「遺誠」と略称）を偽作し、この中にも大応と関山の因縁を強調する関山大応剃度の弟子説を展開しているのである。このことも既に発表済みであるから詳説しないが、「遺誠」を偽作して教団内に流布させる程の奇智に富んだ應禪にとって、曖昧模糊とした関山の伝記を適当に史実をも織りませて創作するぐらいのことは、いとたやすいことであつたと思われる。應禪の偽作の天才に無著道忠がまどわされ、「遺誠」を『正法山誌』に収録して以来、應禪作の「遺誠」が妙心寺派教団によって開創時代の昔から教団内に伝統的に継承され来つた関山金口の「遺誠」として次第に公認されるに至り、「遺誠」と全く同一の内

容を展開している出拠不明の『別伝』説を、「遺誠」は今度は正面から支え補強する有力な史料となつて行つたのである。

応禅の『別伝』が妙心寺派教団内に決定的な影響を与えるようになるのは、大正期に至つて妙心寺の学僧川上孤山が、妙心寺にとつてはじめての通史ともいふべき『妙心寺史』上下二巻を著し、『別伝』説を全面的に援用して関山大応剃度の弟子説、並に関山世寿六十四歳説を主張してからである。この『妙心寺史』の説に影響されて昭和二年に刊行された釈仏海の『妙心寺開山勅諭無相大師御伝』、昭和九年に刊行された阿部芳春の『信濃名僧略伝集』、昭和十二年に刊行された白石虎月の『禅宗編年史』、昭和十三年に刊行された林岱雲の『日本禅宗史』等はいずれも『別伝』説を踏襲するものであった。僅かに昭和十年に妙心寺から刊行された天岫接三編の『妙心寺六百年史』は『別伝』説に否定的で、従来の『六祖伝』をもつて関山伝の正鵠とはしたものの、『別伝』を応禅の創作であると断定することができず、かえつて『別伝』によつて『六祖伝』で不明な関山の前半生を補足するような結果に終つてゐる。昭和十九年より三十年にかけて刊行された辻善之助の『日本仏教史』全十巻は、現在日本仏教史の古典的な著述として、仏教史学界のみならず学界各方面に多大な影響を与えている名著であるが、同書第五巻（中世篇四）において辻博士は『妙心寺史』によつて『別伝』説を援用し、関山は「幼にして伯父月谷和尚に随ひ、建長寺に南浦紹明に謁し、薙髮して名を恵眼と賜はつた」とし、更に「これより修行すること凡二十年、嘉暦二年（一三二七）三十一歳、適々建長の開山大覚禪師五十年忌に値ひ」「忌未だ終らざるに、京に赴き、大徳寺に到り、宗峰妙超に謁し参堂を許された」としている。しかるにその示寂の記述に至つては「寿八十四。時に延文五年（一三六〇）十二月十二日である。」（圈点筆者）と突如『六祖伝』説を展開し、嘉暦二年（一三二七）三十一歳という記述と、延文五年（一三六〇）八十四歳示寂というような記述の矛盾に気づかず終つてゐる。このような流れは、昭和三十七年刊行の至文堂の日本歴史新書『禅宗の歴史』、昭和四十二年刊行の家永三郎氏等監修の三巻本『日本仏教史』等を経て、前述の駒沢大学の

『辞典』にまで及んでいるのである。応禪が『別伝』を著することによって惹き起した波紋は実に大きなひろがりをもって現在に及んでいるのである。

二 『関山国師別伝』の本文紹介

前章において『別伝』の関山伝に与えた影響に就いて考察し、その影響が今日にまで及んでいることを述べたが、それでは『別伝』が多くの人々に親しまれて来たものかというところ、必ずしもそうではない。前章に述べた、関山に關する数多くの著述の筆者の中でも、妙心寺教団内部の僅かの人々を除けば、辻博士をはじめとした殆どの人が『別伝』に目を通してはいないのではないかと想像される。それ等の著述の大部分はすべて川上孤山の『妙心寺史』からの孫引きか、或は『妙心寺史』の影響を受けた辻博士の著述からの援用にすぎないものと判断される。

かつて筆者は「関山慧玄伝の史料批判」なる論文を作成する時、『別伝』を一覧したく、国立国会図書館をはじめ各大学図書館を探索したが、どこにも見出すことができなかった。僅かに『国書総目録』によって竜谷大学図書館の図書目録中に『別伝』の名を見つけたが、所在不明で閲覧ができなかった。もっとも妙心寺山内には現在二、三の寺に秘藏されるようであるが、不徳の致すところか筆者の如き他派の部外者の閲覧は禁じられ目的を果すことができなかった。ところが数年前、たまたま玉村竹二先生より御所蔵の『峰翁語録』の写本のマイクロフィルムを貸与され、その復写本を作成した時、写本の末尾に『峰翁語録』と同筆の『関山国師伝記』なる一文が併集されており、一読したところこれが幻の『別伝』であることを知り、玉村先生の許可を得て同書の復写本も作成した。『峰翁語録』の巻頭には同書の筆録者と思われる江府城西蔭涼山下住慈光小比丘中嵩の、天明七年（一七八七）丁未小春廿八日の序文があるので、同書の筆写年代は判明するが、同書末尾の『別伝』もおそらく同じ頃中嵩によって筆録されたものと思われる。尚『別伝』の後に、「大燈国師授関山和尚印状」、「関山国師遺誠」並に「遺誠跋語六条」（其一雲山義和尚、

其二根外利西堂、其三温中純和尚、其四耽源陽和尚、其五応禅普善和尚、其六寒巖灰和尚、円通大応国師塔銘解説等、
「大燈国師授関山和尚印状」を除けば、外はすべて応禅作と思しき一連の史料が附記されている。『峰翁録』の筆
録者中嵩は、これ等一連の史料を一括して入手し、大応派の『峰翁録』の末尾にこれら同系統の一連の史料を併記併
集したものと思われる。尚『峰翁録』の巻首には蔵書印と思われる朱文四字印（印文・元溟之印）が捺されている。

前書きが甚だ長くなったが、『禅学研究』の編集部より論文執筆の依頼を受けたので、この機会に玉村先生の許可
を得て『別伝』の全文を以下に収録することにした。全文を一覧すれば分ることであるが、『別伝』の文体や用語法
が『遺戒』並に遺戒の跋文の文体、用語法に頗る似通っており、両書共に同一人の手になることを想見させるに充分
である。一例をあげれば両書に「旃」の字が頻出すること。「偶爾」「恢張」「景奉」というような特殊な用語も両書
に散見することができる。更に全文を一覧して初めて知ったことは、『別伝』が未完の書であって、関山の出生から
妙心寺の開創までで終わっていることであつた。このような未完の書が、今日までの関山伝や初期妙心寺史に多大の影
響力を及ぼしてきたことに一種奇異の感を覚えた。

原文に訓点はあつたが句読点は無かつた。今回活字化するに当つて印刷の都合上訓点を省き句読点を加えた。

「関山国師別伝」

師諱慧玄（得度名者慧眼）、号関山、信州更科人也。俗姓源氏、高梨高家苗裔也。永仁四年丙申夏四月、其母夢
金色頭陀来恵一枝華、仍有娠。翌載孟陬人日而誕。金光盈室、挙家歎異。迨長天性穎利、而離塵精明氣綽有
裕。師家世々植信種。其祖父嘗婦敬樵谷仙禅師、頗景奉祖道。故捨一子、以入釈門。得度之後、謂之月谷忠禅
師。是即師伯父也。忠師參諸老、末後謁大応始祖于筑之興徳、蚤卸角駄。大応稟横嶽請、挙補興徳。次視篆于
興聖。師父新創広嚴禅寺于郷里、迎忠師住茲、旦夕問道。師時七歳而好秉童役。雖邪寒溽暑、服勤之情孔切。
居恒不狎声色、不喜葷膾、父察其志、欲意入空門。徳治丁未、鎌倉副元帥巧朝俾大応老祖住建長。月谷已

聴_レ這_二這_一舉_二、欲_レ下_二切_一往_二鎌倉_一省_中大_二応_一老_二祖_一。師年十二、父亦率_レ師同偕_二月谷_一造_二鎌倉_一。師拜_二老_二祖_一肅然如_レ得_二旧_一物_一。孜孜擬_二欲_一得_二度_一。父亦有_二素_一志、故不_レ拒而許諾。師直就_二月谷_一懇_二求_一難_二染_一于_二老_一祖、祖輒召_レ父問_二師_一志、父告以_二師_一平素。祖曰、彼今渾_二处_一塵俗、而觀_二塵_一境、恰如_二糞_一土、宜_レ号_二慧_一眼。稟授事就_二祖_一親摩頂曰、他時擁_二持_一老僧之後者、爾歟。祖預有_二這_一識、箇識_一者法_二鐘_一跨_二龍_一、二_レ者_二竜_一翔_二塔_一後_二境_一地。後將_レ辞之日、祖授_二師_一封紙一小帖曰、却後二十年方好開拆。師進前領受而去。月谷親搆_二一_一溪庵於巨_二福_一山中、而為_二老_一祖省_二覬_一地、時人呼謂_二広_一嚴和尚。老祖順世之後、師親_二炙_一同門者宿_二月谷_一・物外・巨山・栢庵等二十年、嘉曆之初、一夜夢_二大_一応老_二祖_一。祖切告_二師_一曰、時緣已熟、豈可_レ為_二偶_一爾、師問曰、我師_二何_一人、祖乃書_二一_一偈_二示_レ師曰、眼裡見_二雲_一宵、懸崖山万仞、女兒脚慌忙、呼喚絶_二承_一順。師誦誦了而覺、起来一筆記取默論_二其_一意。師時登_二自_一立年、自謂、嚙昔二十年之記、前今正是此時也、速就_二天_一源之塔_一剖_二拆_一祖翁授与底一帖子_一薰_二誦_一一伽陀、与_二夢_一中所_二暗_一記、如_レ合_二符_一節、師感歎礼拜而退。不日有_二一_一僧、告_二師_一曰、此間宗峰和尚於_二紫_一野_一開_二法_一、輒匡_レ徒_二領_一衆宏唱_二南_一浦之道、師聽如_二渴_一驢向_二泉_一、不_レ分_二昼_一夜_一直過_二京_一師、謁_二超_一和尚。相見問道、所_レ示_二一_一箇_二関_一字。人事言竟而後、出_二祖_一翁一紙、且談_二已_一往勝緣。峰拊_レ掌曰、先師既如_レ此乎。從_レ是針芥相投直待_二于_一湯藥、転至_二知_一藏。峰一日問_二師_一曰、富嶽弘開全体一_レ目者在_二于_一駿陽、爾經過時目_二擊_一之否。師答曰、不_レ見、峰曰、慧眼藏司為_レ道切如_レ斯。師一夕忽焉會_二得_一所_二參_一底話、平日礙膺物一時撲落。急詣_二方_一丈_一呈_二所_一悟。峰曰、上古榜樣別打_二一_一偈_一来。師歸_レ寮遺書_二一_一偈_一呈_二之_一曰、雲門関鎖太孤絶、万仞懸崖撒_レ手難、活路通收無_二小_一路、看看大道是長安。峰歎曰、往昔六祖許_二可_一南嶽_一曰、汝已如_レ此、我復如_レ此、適用_二一_一器_二水_一如_レ伝_二一_一器_一、是故運庵祖師於_二天_一沢老_二祖_一、又天沢老_二祖_一於_二横_一嶽先師_一授受之際、各自以_二古_一帆未掛話。復先師横嶽示_二山_一僧_一以_二這_一箇一字。山僧与_二爾_一亦爾、爾今透徹如_レ斯、宜_レ号_二関_一山_一改_レ眼為_二玄_一。仍而賦_二一_一偈_一頌_二以_一証_レ之、從_レ是衆改_レ観。爾来竜峰道響昂然逐_レ日雷鳴、闔府華属言行等伝、名達_二天_一朝。仙院今上驟_レ詔徵_二問_一答、所_レ奏慙_二旨_一恩渥籍甚、兩朝齊特賜_二国_一師徽号、參詳機縁建乎不_レ撓。元応帝詔_二国_一師_一入_二内_一、国師偶々不安、命_二師_一趣_二于_一詔。帝問、不下_二与_一三_二万_一法_一為_二、侶者是什麼人、師起鞠躬曰、不下_二与_一三_二万_一法_一為_二、侶者是什麼人、帝以_二手_一中_二圭_一画一画曰、者個齋、師珍重

而退、帝大悦。元徳甲子、師年三十有四而受記。其略曰、古人得旨後、深隱堅韜不_レ必長養虛廓聖胎、專有_レ意_レ憂_レ后昆_二者也。師聽得歎異而出去、不日戻止濃陽結庵願_レ玄、靡_下知其蹤跡_二者。建武乙亥之秋、国師不安。延慶上皇大動_二睿情_一、差使_二近臣_一問得髓人、国師対以_二玄関山の嗣旨_一。臣還奏、上皇復以_二藤原相_一寺_二甘露宣曰、朕欲_下改_二革離宮_一就_二一梵刹_一、預賜_二厥号_一、朕誓搜_二索海内_一、使_二他為主宰_一。国師輒応_二聖旨_一呈進正法山妙心寺之号。垂相周旋奏、即日降_二宣使於四塞_一搜_二求師行履_一。東征宣使思惟、宣詔雖_レ重世界広濶而其人難_レ得、不_レ如過_二筮家_一問_二可否_一、尋抵_二其家_一而請_レト、博士密啓_二其事_一。其翌果至_二勢多橋辺_一、有_二一僧_一、異貌鮮麗、容服諱古、与_二宣使_一叙話恰如_二旧相識_一。宣使幸問_二師風度_一、彼僧稍從_二生縁_一一生事蹟僉殫叙話。宣使重問曰、他今在那処乎、対曰、現今在_二濃陽山中_一葆_二光多年_一与_二余同_一僑居_二者也。吾宜誘_レ旃。卒抵_二其郷_一廻指_二山間_一、須臾失_二其所在_一、宣使愕然。竟稽_二首其跡_一曰、暗察_二化仏意_一在_二于此_一欲_レ休_二睿襟_一者乎、械華臻_二庵室_一、其人果爾。宣使頼陳_二叙詔_一、師対曰、外齊樵夫躬_二内匿_一心_二聖旨_一、徳_二唯師_一懶_二蹟_一、突然爰独坐爾、庶公周旋為_レ吾奏_二達百拙_一幸甚。宣使数々雖_二勸諭_一師峻拒而不_レ顧。宣使復曰、吾聞靖退小節、師恩如_レ山、不_二啻_一上皇希_二顏象駕於旦夕_一、国師尊侯危如_二懸絲_一、如何聽而不_レ省耶、当_二此時_一豈有_二高枕之理_一、速擬_二觀光_一可矣。師於_レ此瞿然起曰、公者哲人也、的意射_二心肝_一、吾豈忍_レ默乎。言訖偕趣_二京兆_一即詣_二龍宝毘耶室_一候_二問病痢_一。国師擡_レ頭曰、此間上皇之宏願杲日麗_二天_一、嚮昔建治上皇_{后宇多}為_二横嶽先師_一於_二西京安井郷_一預營_二輅光庵_一堅_二請于此_一、今龍翔境也、老僧初參_二謁先師_一之地、先師指_二庵後_一華園_二面告_一余曰、吾滅後三十年、此地有_二老僧兒孫_一恢_二張吾道_一去焉。復上人得度之際、先師撫_二上人頂_一曰、擁_二持老僧之後_一者爾歟、上人今記得也否、師曰、吾昔時如_二閻中受_一物、国師曰、先師乘_二願力_一来底古仏也、可翁老兄帰朝後語_二余曰_一、尋_二覓大唐国裡_一求_二過量人_一、如_二先師横嶽_一人_二叵_一獲。故一言所_レ貽符_二合于此_一。夫華園地者為_二上皇聖蹟居所_一、啗若先師所_レ差彼此以可_レ為_二偶爾_一乎、倍_二万老僧属_一後事、師肅然唯諾。師先詣_二龍翔祖塔_一、次援肅謁_二離宮_一。上皇忻然接約以_二宏願睿志_一、師肅然応_二聖旨_一。天顔大喜賜_二御製詩章_一曰、曩祖為_二貽書一封_一、龍尋龍宝衆中龍、瑞奇枕上三更夢、師是人間鷄足峰。遷詔_二師曰_一、丐別和_二一偈_一、莫_二必次_一其韻、師応_二

聖旨ニ奉ニ一偈曰、空手入山空手処、納衣百結足願神、千鈞一髮雖非仕、縁弘龍翔祖塔塵。上皇睿感至渥焉、師退。他日訪宣使問曰、上皇凭誰知我愚生諸余。宣使対曰、化僧旦夕口実豈違一毫、師聴曰、宣使甚饒舌、盡為我秘。宣使復談師曰、余稟詔之日、自謂、世界広濶而今欲搜索、恰如暗中放箭、纔求辨方聊投筌家、所卜の然大獲其幸。故逮還北闕、直抵其宅偏謝他占考。博士駭歎而語余曰、先有告公之來訪于前夕二者、願之老僧也、僕問其名、答曰、我是西京龍翔之僧、預示委曲於汝、言了而夢覺。翌旦龍翔知事尋僕茅舍來低声告曰、我寺開祖之像至今朝隱没而不見、將為賊手將為遊化歟、僕察將靈夢來告以遊化、他日知事復來謝僕曰、占考甚奇、其像還來瞭然如本矣。師聴曰、低声低声、彼此必破口勿漏洩他好。于茲上皇預營一庵号微笑上皇從鶏足峰之縁曳將來矣。乃請師。次創玉鳳院先遷玉座、漸次雖遷皇居於萩原、敢為臨幸所爾。于時延元丙子。妙心之艸創、今上開運之際天子一統之直隸。是故宏有扶翼睿情、肅闕精籃一時如涌出、凭是闔府華屬遐邇縑素、瞻礼隨喜輻輳者不絶、師絲是入寺開堂。諸山僉歛喜。文武百僚之賀、江湖同門之祝、其様巍巍然諸方龍象威騰踏而臻焉。

付記 月谷宗忠禪師伝

月谷に関する史料としては従来『大応録』（巻下）の仏祖贊に、「興聖月谷長老」と題した

頭髮髻懸双眼青

全提一句得三人憎一

龜毛拈子未曾動一

凛々清風匝地生

という偈頌一首が載せられ、「円通大応国師塔銘」に「其法を嗣いで列刹に分居する者、興聖の忠（以下略）」と記載される以外に、さしたる史料もなく伝記も不明であり、『別伝』が月谷を高梨氏の出身とすることに對して、これを否定する史料も肯定する史料も見られなかった。近年たまたま福岡市博多妙楽寺の渡辺桂堂師より、同市崇福寺所蔵の『横嶽諸祖行実』（正しい題僉は「諸祖行実 横嶽山」）に収められる月谷宗忠の伝記史料の提供を受け、月谷の伝記の概要が判明したので、『別伝』の本文に引き続き月谷の伝を付記しておく。渡辺師の考証によると、同書は崇福

寺第七十九世の江月宗玩（一五七七—一六四三）によって筆録されたものらしく、江月以後の二世代の伝（第八十世江雲、第八十一世質休）は、第八十二世古外宗少の筆録と推察されるが、江月の拠つた原史料（月谷の）は不明である。以下月谷宗忠禪師の伝。

月谷宗忠禪師、生_三于豊後曰杵氏。志学歳、投_三宇佐神通寺_一、薙髮染衣。長而神異多、着_三雜碎衣_一、満_三具尸羅_一。一日聞_三南浦禪師在_三西都法窟_一大開_三炉鞴_一、徑徂_三礼拜_一、国師一見器許、命_三侍瓶_一。親輔_三弼師道_一積有_三年_一、始終無_三難色_一、時人以_三香林_一呼_レ之。朝參暮請亡_三倦_一、竟而受_三記莂_一。當_三締于草菴背振山裡_一聖胎長艱。厥後_三応_三檀請_一出_三世干_一関東建長禪刹。不_三幾何_一遷_三筑州興聖護国寺_一。晚年肥之前州松浦手_三搬_三万_一国山聖寿寺_一、導_三誨海西_一二嶋之群生、令_三了_三悟_一千聖不伝之妙道。當_三是時_一国人頗_三丹悃_一歛声雷動。康永三年七月二日、趺坐而寂。

注

(1) 「光嚴上皇院宣」妙心寺藏

妙心寺可_レ下_三令_一再住_一

給_三之_一由、

御氣色所_レ候也、仍執達

如_レ件、

観応二年八月廿二日 隆蔭

関山上人禪室

(2) 妙心寺第二世授翁宗弼を関山の法嗣とする有力な史料として、関山が授翁に与えた「印可状」が現存し、国の重要文化財に指定されているが、これが関山の自筆でなく後世の偽作であることは、既に拙稿（『禅文化研究所記要』第四号所収

「関山慧玄伝の史料批判」で証明した。関山から授翁への

印可状が偽作されなければならないということは、関山から授翁への印可状がなかったということの証明に外ならない。

関山寂後壹百年の遠諱に当り、義天文承は

不知_三伝法正_一耶邪

滅尽還_三他_一老櫓楂_一

微笑春回百年後

花園猶有_三一枝花_一

という拈香の語を遺している。義天は香語の結句において「花園猶一枝の花あり」と花園（妙心寺）の法系の一流性を強調はしているものの、第一句において伝法の正邪を自問自答せざるを得なかったのは、大徳寺は勿論のこと、妙心寺教団の中においてさえ関山、授翁、無因、日峰と次第する法系が一流であるということに疑念を抱く空気が当時濃厚であっ

たことの反証に外ならない。

- (3) 正法山は妙心寺の山号で、六祖は関山、授翁、無因、日峰、義天、雪江の六師を指す。尚「六祖伝」の書誌学的な考察については、拙稿「六祖伝の版本について」(『禅学研究』五十六号所収)で述べた。

- (4) 此山玄淵の『正法山六祖伝考彙』や、草山祖芳の『樹下散稿』。荻須純道著『日本中世禅宗史』中の「関山の生年説について」参照。

- (5) 前出の『日本中世禅宗史』中の「関山慧玄について」参照。

- (6) 同右参照。

- (7) 拙稿「関山慧玄伝の史料批判」中の「関山国師別伝について」

- (8) 宝暦五年(一七五五)東嶺は竜雲寺にて応禪と出会ったとするが、応禪は既に寛保三年(一七四三)に示寂している。

- この時東嶺が出会ったのは応禪の弟子ではなかったか、或は東嶺の記憶の間違いであるか、問題は残る。

- (9) 白隠が「別伝」を知っていたのは事実で、白隠の著述の中からも「別伝」の影響を指摘することはできる。例えば「壁生草」上巻の「如大定聖応国師一經過東海道廿度終不見富土山」初聞此事「常感信」など。

- (10) 拙稿「関山慧玄伝の史料批判」

- (11) 峰翁、諱は祖一。筑前崇福寺の大応(南浦紹明)に参じてその法を嗣ぎ、崇福寺に出世し、退いて濃州遠山の大円寺を創めて第一世となつた。正宗大暁禪師(一二七四—一三五七)

- (12) 其五応禪善和尚の跋語までは既に無著の『正法山誌』に記

載する通りであるが、ここでは更に其六として寒巖灰和尚(？—一七四四・古月下)の左の如き跋語(？)を附す。

謹上華園

一等老大和尚 侍衣閣下

寒巖慧灰九拜

近頃得_二

国師遺誠於雲水之僧、予拝覽之、其筆力語句実不疑_二出国師親口_一。故写以上_二

金猊下_一、若得_二電照_一賜_二一語_一、為_二兒孫万世之龜鑑_一。

誠恐不備

華園一等老大和尚は、妙心寺三百五十世の梅岑宗(玄)乾のことで、塔頭智勝院の住職(智勝院の隠察を一等軒と称した)。寒巖は豊後少林寺の住職で、当時道仙天下に響き参禪の徒は常に堂内を溢れた。寒巖は雲水より入手した未知の「関山遺誠」を奇として、早速少林寺の宿坊に当る妙心寺智勝院の梅岑に呈上したのである。無著が「関山遺誠」を『正法山誌』に収録するのは、寛保三年(一七四三)無著示寂の一年前(応禪示寂の年)である。寒巖の示寂は無著と同じ延享元年(一七四四)であるから、丁度同じ頃、妙心寺にとって全く未知の「遺誠」があちこちから妙心寺に寄せられていたことがわかる。

- (13) 「大応国師塔銘」を十八節に分ち、一節毎に解説を附すが、七節(明建長受_二職_一)までの解説で終っている。

末尾ながら貴重な史料を御提供下さった玉村竹二先生と、妙楽寺御住職渡辺桂堂師に深甚の謝意を表します。